上池袋の木造密集地域における現代版「木賃文化」を耕すプロジェクト

かみいけ木賃文化ネットワーク【東京都豊島区】

設立年月　2015年４月
メンバー数　23人
代表者名　山本 直（やまもと・ただし）
連絡先
住所　〒170-0012 東京都豊島区上池袋 4-20-1 くすのき荘
電話　090-7401-5673
Eメール　yamadasou.kamiike@gmail.com
ウェブサイト
http://yamadasoukamiike.wixsite.com/mokuchinnet
Facebookページ
https://www.facebook.com/yamadasou.kamiike/

【団体のミッション】
私たちは、豊島区上池袋地域を中心に、活動する場を持ちたい人たちとともに、“足りないものは、まちを使う”文化＝木賃文化の視点から、アクションと場と人をつなぎ、ネットワークが広がることを目指しています。

団体設立経緯

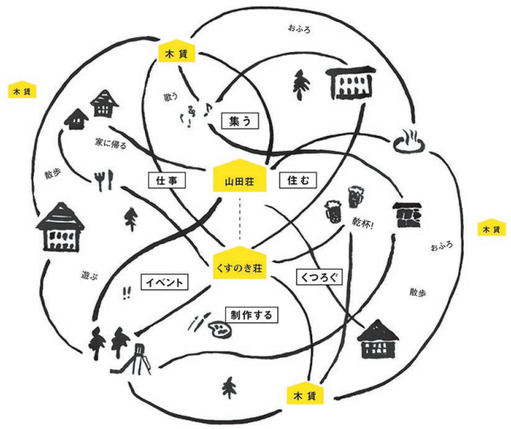
かみいけ木賃文化ネットワークは、プロジェクトメンバーの１人が所有する木造賃貸アパート（木賃アパート）「山田荘」とリノベーションした事務所兼住居「くすのき荘」の活用をきっかけに2015年に立ち上がりました。

木賃アパートは、風呂なし、トイレ共同というスタイルが多く、現代の住まいとしては色々と機能が不足しています。住まいとしての機能が足りなければ住む以外の使い方を考えたり、別の木賃や公園、銭湯など、まちにあるものをネットワークして使えば良いのではないか。このように「足りないものは、まちを使う」文化を木賃文化と呼んで実践しています。

地域概要

東京都豊島区の上池袋周辺地域は、人口 1.5 万人程度。1960年代の高度経済成長期における池袋駅周辺地域の副都心化に伴い、単身者向けの木賃アパートが数多く建てられた木造密集地域です。

現在これらの木賃アパートは、老朽化やライフスタイルの変化から空き家が目立つようになりました。また、相続などのタイミングで取り壊されて、多くは駐車場やミニ戸建てに姿を変えています。暮らしに必要なサービスは、近くの都市・池袋で事足りるため地元の商店街は姿を消し、人々が集い憩う場が少なくなってきています。



コンセプト図

活動に至った理由や背景

あっという間に姿を消す木賃の状況を疑問に思い「山田荘」と「くすのき荘」を使いながら木賃文化を実践することにしました。メンバーを募集したところ、アーティスト、デザイナー、ライター、DIY 工房スタッフ、舞台衣装家、即興演奏家など 14名が集まりました。

木賃文化を醸成するためには、地域に向けた彼らの活動をサポートしたり、地域の人発の多様なアクションを積み重ねたりすることが必要ではないかと考えました。そこでメンバーと、木賃を使いながら地域に眠っているニーズを掘り起こすことにしました。

活動内容と成果

STEP-1　活動を地域に開く・周知する広報ツールの充実

私たちの活動を知っていただくために、パンフレットを作成しました。活動した様子についてはホームページやブログで発信しました。

広報ツールを作るためには自分たちは何者で、なぜこの活動をやっているのか、人にどのように伝えたら良いのかを深く考えるプロセスが必要です。私たちは活動の立ち上げ期にあり、実績もない中、かつコンセプトがわかりにくいだけに、情報をまとめることにとても苦労しました。

いつものオープン日

くすのき荘での展示

OPEN CLOSET

くすのき荘の外観

何度もデザイナーさんとやり取りしたり、レポートの文章を練り直したりする中で伝える力が付き、発信力も高まったと思います。その甲斐もあってか雑誌やラジオなどに活動を取り上げていただくなど、仲間が増えることにつながり、これまで14名だったプロジェクトメンバーが2018年には23名になっていました。

いつものオープン日

「くすのき荘」は常に開いているわけではなく、メンバーが何かしら企画を行う時しかオープンしていませんでした。そこで日々の活動を広く伝えるために、日常的に場を開く「いつものオープン日」を隔週で実施しました。学校帰りの子どもたち、近所の方などがふらりとやって来ました。

“いつもの”オープン日なので、特にアクティビティを用意していなかったのですが、これが良かったと思います。来た人は、最初は戸惑ったり、そわそわしていたのですが、たとえば小学生たちは、場所を探検し始めたり、おばちゃんと話し始めたり、マダムがマッサージ講習を始めたり。何も用意されていないからこそ、能動的に場を読み解いていく、これが木賃の一つの使い方だと思います。

STEP-2　さまざまなネットワークの仕方を実践する、木賃をネットワークしながら使ってみる

プロジェクトのメンバーとともに、木賃物件を住む以外の機能、たとえばワークショップ会場や、展示空間、劇場といった多目的な用途で空間を使う実験をしました。ワークショップ(6回)、展示（4回)、音楽（2回)、演劇（2回)。

たとえば演劇では、地域の食にまつわる記憶を演目に落とし込んだ『ある皿の上』を上演。展示としてはアーティストメンバーによる「山田荘」「くすのき荘」の2つの拠点を行き来するような個展『放電する身体』を開催しました。

ワークショップとしては、舞台衣装家による『OPEN CLOSET』。着なくなったけれど捨てられない、思い入れのある服を持って来てもらい、作家が服にまつわるストーリーを聞きながらリメイクするものです。

「くすのき荘」に遊びにきた子どものパパや、近所のおばちゃんが参加するなど、特定のお客さんが何度も通うようになりました。また、食とコミュニケーションに関心のあるメンバーは、ワインにまつわるワークショップを開催し、今では自宅をプロジェクトの拠点として開きつつあります。彼らは「くすのき荘」で活動してみたことで、場をプロデュースする感触を掴んでいったように思います。

STEP-3　新たなネットワーク物件をリサーチする

新たなネットワーク物件を探すため、まち歩きや地元の不動産屋さんや木賃オーナーへのヒアリングを行いました。不動産情報にも載せられないような古くて壊すことを前提にしている物件が多くある一方で、木賃アパートには建てられた経緯や、居住者の暮らしぶりなど建物固有のストーリーが込められていることを実感しました。それらは不動産情報には載らない、物件ごとに固有で貴重な資源だと思います。

木賃のリサーチを進めているなかで「くすのき荘」のオーナーと交渉したところ、これまで使えなかった1Fのスペースと、隣接する木賃の空き物件を「くすのき荘」と一体的に借りられることになりました。

空き物件には、メンバーの即興演奏家が、友人とともに住みながら自ら活動の場を作ることになり、音楽スペース「anoxia」が誕生しました。また、リサーチで出会った上池袋1丁目の木賃アパートには、彼の友人が住みはじめ、「anoxia」とネットワークしながら暮らしています。

木賃のリサーチ

メンバーがオープンしたスペース「anoxia」

山田荘入居メンバーのセルフリノベーション

ちょうちん“光”のワークショップ

町会のお祭り

木賃文化週間

STEP-4 「くすのき荘」での住民発の企画の実施とサポート

クリエイターとともに「くすのき荘」を開いてみると、徐々に地域からの反応が現れ始めました。近所のパパによる子ども向けプログラミング講座や音楽サークルの音楽会兼納涼祭、子どもの洋服交換会兼ママBARなど、10ほどの企画が持ち込まれました。みなさん地元で開催したいけれど、公共施設だと予約や飲食の制限があるため、できることが限られるようです。

また、地元の上池袋池八町会からは、9月のお祭りのときの、お神輿の休憩所の協力依頼が舞い込みました。ただ休憩所に協力するだけではつまらないので、お祭りに参加したことがない人でも気軽にお祭りを楽しめるよう、オリジナルのちょうちんをつくる『ちょうちん“光”のワークショップ』を企画しました。

私たちのメンバーは、それぞれの得意分野を活かし、デザイナーはWS講師に、建築家はちょうちんを飾る木組みを制作し、電子工作隊はライトの設計まで行いました。残念ながら休憩所は台風で中止となりましたが、その後町会からは、春祭りでの出展を打診されるなど協力体制が出来つつあります。

ただ単に場所を提供するのではなく、私たちだからできることを付け加えることで、空間が単なる場所ではなく何かが起こる“場”になったように思います。私たちのコンセプトである「足りないものは、まちを使う」について、当初は場に足りない“機能”を思い浮かべていましたが、足りないものの中には人の“技”や“アイデア”があることに気付きました。

STEP-5 木賃文化週間の開催（3/17〜25）

この1年の締めくくりとして、木賃文化の実践がどうだったのか、取りまとめの企画を考えました。しかしながら、とにかく色々なことが起こったため、集約することは難しいという結

論に至りました。そもそも木賃文化“ネットワーク”なので、コンセプトが勝手に広がっていってほしい。そうであれば拡散しようと、9日間の『木賃文化週間』というキャンペーンを実施することにしました。

ちょっとした日常のできごと的な26企画を「足りないものは、まちを使い」、「山田荘」「くすのき荘」をはじめ公園や他の木賃アパート、地域の高齢者が集うスナックなどを会場にして展開しました。

たとえば「山田荘」のトイレ共同の生活に端を発した『木賃トイレ会議』、上池袋周辺地域の特性を地図情報から読み解く『地理人とスルキのくすのきばなし』、美術家・中崎透さんの視点でまちを体感する『Practice map ツアー&トーク』など。ほかにも「山田荘」に住むデザイナーが自宅での住み開きインスタレーションを展開したり、くすのき公園で野点や太極拳をやってみたりしました。

このように多様な切り口を用意したことで、関心領域に応じて多くの方が参加してくれました。興味深かったのは、木賃に1人暮らしをしているという男性、通称「木賃さん」が、木賃文化週間を存分に楽しんでいったことです。木賃さんは、どうやら木賃暮らしに自信が持てなかったそうですが、その意識が変わったようです。

課題と解決方策

この1年は「山田荘」「くすのき荘」を中心に活動を展開してきましたが、特定の場所に活動が集約されすぎていたことは反省点です。場所を使いたいという人はたくさん掘り起こすことができましたが、まだまだ自ら場を広げていく人は不足していますし、地域の中にももっといるはずです。単にサービスを享受するのではなく、自ら求める場を開拓して使ったり、仕組み自体を面白がってくれる人たちをいかに巻き込めるかが、このプロジェクトの肝だと思います。

上述したように「くすのき荘」では、これまで使えなかった1階部分を借りられるようになりました。そこで、ここを「MOKUCHINロビー」として開き、木賃文化の情報発信拠点としながら、木賃文化をネットワークしていく人材を開拓していきます。また、移動式の「MOKUCHIN屋台」を制作し、プロジェクトを外に開いてさらにネットワークを広げていこうと考えています。

今後の予定

この間の経験から、今後は派手なイベントを開催するというよりも、「足りないものは、まちを使い」小さなできごとを積み重ねていきたいと思います。また、地域で始まるちょっとした活動をサポートしていきます。

まちやコミュニティにとって大事なことは、お金を使うだけの消費者としてではなく、暮らしを創造する生活者として生きる市民がたくさんいることだと思います。そんな人たちを少しでも後押しできる場や関係性を、木賃文化で耕していきたいと考えています。